



Title	ガンディー主義のテキスタイル：社会を変える非暴力の布
Author(s)	岡田, 弥生
Citation	a+a 美学研究. 2023, 14, p. 144-161
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103377
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

布

ガンディー主義のテキスタイル

——社会を変える非暴力の布

本稿は、ガンディー主義の思想や実践が現代のテキスタイルの生産においていかに継承されているか、二つの生産者の分析をとおして考察し、彼の思想が今日のファッション産業にどのような意義を持ちえるかを検討する。

ガンディー主義とは、一般に彼の思想と実践哲学を指し、その本質は「真理と非暴力」という倫理的原理を、社会日常の問題に適用すること¹⁾だと理解されている。植民地下のインドでガンディーが展開した独立運動によって、世界に広く知れ渡り、M・L・キング・Jr（一九二九—一九六八）やアウンサンスーチー（一九四五—）などもガンディーの思想に影響を受けたとされる。政治や経済、環境活動などで示唆を与えてきたガンディー主義であるが、一見関わりなさそうなファッション産業でも参照されてきた。というのも、ガンディーとテキスタイルとが、カーディーという素朴な布地をとおして深い関わりを持つているためである。インド国内の布地生産が経済的自立を果たす手段だと信じたガンディーは、手紡ぎ手織り布カーディーに社会的役割を見出し、国民にカーディーの生産と消費を推奨した。この動向は、カーディー運動とも呼ばれる。植民地下で普及したカーディーは、現在でもインド国内外で受容されている。

ガンディーの思想とテキスタイルの生産に注目する意義は、第一にテキスタイルの生産が新たなあり方を検討する必要に迫られている点にある。ファストファッションの流行は、衣服の大量生産と大量消費を促進し、人や環境、動物へ深刻な影響を与えてきた。特にテキスタイルの生産は、原料の栽培や染色、生産に至るまで、多くの改善が求められている。技術や制度を整えるとき、その指針となるような考えが必要となるだろう。第二にカーディーにまつわるガンディーの思想が、サステナブルやエシカルという考えと親和性をもちながら、今日のファッション産業で再評価されつつある点にある。近代化へ懸念を呈し、手仕事や地場産業に価値を見出したガンディーの思想は、現代のデザイナーや生産者に共感を呼びつつ新たなものづくりに貢献している。しかし、ファッションやデザインの分野においてガンディーの思想が詳しく論じられたことはほとんどない。第三に、カーディーをめぐる動向は、デザイナーによって社会に変化をもたらそうとする事例だと捉えられる点である。カーディー運動はガンディーの理念を実践へと昇華させ、実際に社会に変化をもたらした。デザイナーの本質が、よりよい社会の構築に貢献することであれば、彼がカーディーをとおして成し遂げたことは一考に値する。本稿のねらいは、カーディーに反映されたガンディーの思想

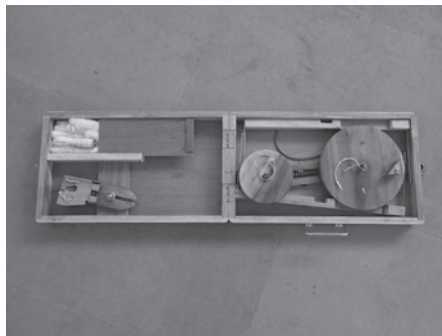


図3 | ガンディーが発明した糸車
(筆者撮影 2022年11月)



図2 | カーディー
(筆者撮影 2022年10月)

カーディーをめぐる思想の源泉

ド国内では、外国製の布のボイコットをすすめるスワデシという民族運動が盛り上がりを見せていた。

このような状況で、ガンディーは徐々に手紡ぎ手織り布カーディーの構想を練り上げてゆく^{『1』}。イギリスへの留学を経て、南アフリカから帰国したガンディーは一九一五年に故郷のアフマダーバードにサティヤーグラハ・アーシュラムという施設を設立する。ここでは、自らの衣服は自ら作ることが目標に掲げられ、ガンディーとアーシュラムの同居者は、当時は衰退していた手紡ぎ手織り布復興に尽力した^{『2』}。その過程は容易でなかったものの、一九一八年にはすべての工程を手紡ぎ手織りとした布カーディーが誕生する。アーシュラム設立規約の草案には、真理や非暴力、禁欲などへの誓約とともに、手仕事、手織りに関する項目も記載され、同居者たちはそれらを遵守するよう求められた^{『3』}。アーシュラムでは、理念が実践へと移行され、その活動はのちに大多数の国民を独立運動へと招き入れるカーディー運動へと変容してゆく。

カーディーは、サティヤーグラハという運動の一部としてガンディーによって創案された。サティヤーグラハとは、「真理の把持」を意味し、ガンディーによると「あることが気に入らず、それをしない^{『4』}」ときに使う力だという。彼が南アフリカ滞在中に始めたインド人強制登録法への抗議活動からはじまったサティヤーグラハは、その後様々な独立運動を特徴づける手段となった。サティヤーグラハの語にも含まれ



図1 |
パーク=ホワイト《マハトマ ガンディー》1946年

を解明しながら、非暴力に特徴づけられるガンディー主義の理念や実践が、今日のファッション産業で応用される可能性を探ることである。一連の考察とおして、今後のテキスタイル、ファッション産業のあり方を検討するうえで手がかりとなることを目指す。

一枚の布から国家の象徴へ

カーディー (Kardhi) とは、インドやバングラデシュ、パキスタンなどの南アジアの国々において手紡ぎ、手織りされた布を指す。しかし、機械製の布が普及する以前、布の生産は手紡ぎ手織りであったため、カーディーは布全般を指したようである^{『5』}。植民地支配と産業革命によって、二〇世紀初頭には手紡ぎ手織りの習慣がほとんど途絶えていたインドで、手紡ぎと手織りの技術を復興し、それによって生産した布を「カーディー」と呼びインド全土へ普及したのが、インド独立の父ともいわれる M・K・ガンディー (Mohandas Karamchand Gandhi, 1869-1948) である^{『図1』}。カーディー^{『図2』}は、伝統技術をもちいて制作されるものの、ガンディーによって生み出された新しい布である。ガンディーが独立運動のなかで戦略的にもちいたことで、カーディーはインド独立の象徴ともみなされるようになり、現在ではインド国旗の公式な布地として指定されている。

一枚の布が政治の舞台へと持ち出された背景には、インドとイギリスとの織物交易における力関係の転換が関わっている^{『6』}。豊かな染織文化を有したインドは、一八世紀まで世界最大の綿織物の輸出国であった。しかし、産業革命によってイギリスが大量の機械製の布を生産し始め、安価な綿織物がインドに流入した結果、植民地支配による不平等な貿易制度も手伝って、インドは最大の綿織物輸出国から輸入国へと転じた。そこで、二〇世紀初頭イン

る「真理（サティヤー）」は、ガンディーの思想の基礎をなす概念である。サティヤーとは、「真理」や「真実」を表すサンスクリット語であり、ガンディー自身は、「真実」^[9]こそ、ほかの無数の原則をそのなかに含んでいる大原則なのである^[10]と語る。彼にとって、真理とは、いかなる時にも考えや行動の指針となる規範であり、さらに神とも等しい信仰の対象でさえあった^[11]。サティヤーを達成する手段のひとつとして挙げられる考えは、「非暴力（アヒンサー）」である。アヒンサーとは、サンスクリット語で「不殺生」「不傷害」を指し、より積極的な意味では「慈悲」「博愛」などを意味する^[12]。真理と非暴力とは密接に関わり合っているが、ガンディーは「アヒンサーはあくまでも手段であり、真理が目的」だという^[13]。非暴力の実践によって、自己は成長し、ひいては真理に近づくのだとガンディーは考える。彼にとって非暴力は、他に危害を加えないだけでなく、慈悲の心をもって日々行われるべき積極的な行為であった。つまり、サティヤーグラハは、非暴力を徹底しながら真理を追求するという彼の理念であり、日々の生活に根ざした改革の原動力であった。

サティヤーグラハを行使してガンディーが達成しようとした目標は「自治（スワラージ）」といわれる。スワラージとは、「自己支配」や「自己統治」をあらわす語であり^[14]、その意味は二つの側面をもつ。ひとつは、国家の独立という外的状態であり、もうひとつは、自らの欲望を律するという内的状態である。ガンディーは、国民の精神的な自律があつてこそ、国家の自立が果たされると考えていた。このことは彼の著書『ヒンド・スワラージ（Hind Swaraj or Indian Home Rule）』で詳しく語られる。ガンディーは、同書の中で植民地支配がもたらす近代文明を「病」だと非難するとともに、インド人自らが進んでそれを受け入れているのだと指摘した。そこで、自発的な搾取の状態から脱却しスワラージを目指すために打ち出した手段こそ、糸紡ぎである。工業化を進めようとする社会と逆行するかのようなこの政策は、ジョン・ラスキン（John Ruskin, 1819-1900）やレフ・トルストイ（Leo Tolstoy, 1828-1910）など西洋の思想家の影響がある。彼らから近代化への懐疑的な眼差しや肉体労働の大切さを学んだガンディーは、『ヒンド・スワラージ』のなかで「機械は近代文明の主なるしで、大きな罪である」^[15]と強く批判し、以下のようにも語る。

以前、人々は戸外で自分がよいと思われるだけの労働を拘束されずにしていました。いまでは何千何万の労働者

たちが生活のために一緒になって、大工場や鉱山で労働しています。労働者たちの状態は動物以下になっていきます。労働者たちは鉛などの工場で生命の危険を冒して働かなければなりません。この利潤は金持の人たちに入ります^[16]。

いかに機械や工場が人々から本来の労働を奪い、不平等な社会を作り上げているかをガンディーは懸念する。それに対抗して「古い、伝統のある、清らかな紡ぎ車」と「人が織った布地」^[17]を人々が受け入れることを願う。なぜなら、糸紡ぎこそ大多数の人々が関わることでできる産業であり、一部の工場主に労働者の自由が管理されることなく、また利益も平等に行き渡るためである。罪深い機械に対して、紡ぎ車は非暴力の象徴だとガンディーはいう。このようにして、糸紡ぎやカーディーは、スワラージ実現のために、サティヤーグラハの具体策としてガンディーによって選び取られた。

非暴力の生産とデザイン

ここからは、カーディーの生産とデザインに注目しながら、もう少し具体的にガンディーの思想がいかに布地に反映されたのかを紹介したい。まずは、生産である。ガンディー自身によると、カーディーの生産には、「綿を栽培すること、綿摘み、綿繰り、ゴミの除去、綿打ち、篠作り、糸紡ぎ、糊付け、染色、経糸と緯糸の準備、手織り、水洗い」^[18]の作業があり、ガンディーがとくに重要だとみなす工程は、糸紡ぎである。糸紡ぎとは、木綿や羊毛、繭糸など原料となる短い繊維の束を、ねじりながらつなげてゆくことで糸を作る技法である。糸紡ぎに用いられる道具は、紡錘や紡ぎ車、紡績機などがあるが、ガンディーが主に用いるのはチャルカとも呼ばれる紡ぎ車である。一九二四年に発行された『ヤング・インディア（Young India）』には、ガンディーが糸紡ぎに期待する一一の効果が掲載された。

私が糸紡ぎに要求するのは、次のことである。

- 1 余暇の時間があり、少しの稼ぎを得たい人に最も迅速に職を与える
- 2 多くの人々に馴染みのあるものである
- 3 習得が簡単である
- 4 事実上、資金を必要としない
- 5 紡ぎ車は、簡単に、安価に作ることができる。しかし、私たちのほとんどは、糸紡ぎがタイルや破片などでできることを知らない
- 6 人々は糸紡ぎに強い反感を持たない
- 7 凶作と飢饉にみまわれたときに、ただちに救済となる
- 8 糸紡ぎはただそれ自体で、外国製の布地の購入によるインド国外への富の流出を防ぐことができる
- 9 糸紡ぎが多数にゆきわたると、自ずと援助を必要とする貧しい人々を救済することになる
- 10 どんなに小さな成功であったとしても、人々にとっては非常に直接的な成果を意味する
- 11 人と人との相互の協力をゆるぎないものとする最も有効な道具である^[11]

この記事からは、糸紡ぎが職を創出することで、貧困の救済になり、ひいてはインドの自治へと導く手段になるというガンディーの信念がうかがえる。前節で確認したように、ガンディーは、多くの人の職を奪い過酷な労働環境を生み出す機械の暴力性を非難し、糸紡ぎこそ理想的な労働だと考えていた。それは、糸紡ぎが誰でも簡単な道具ではじめられる技術であり、農村地帯の貧困な国民も平等な労働の機会を得ることを期待したためである。仕事のない人々に支援を提供するのではなく、個人の自立の方法を示すことが、やがては国家の独立につながると彼は考えていた。さらに、ガンディーは糸紡ぎに独自の役割を託した。彼の「神の名において行われる糸紡ぎにまさる礼拝を私は知りません」^[12]という言葉からは、糸紡ぎを単なる生計手段としてではなく、祈りのような神聖な行為だと捉えて

いたことがわかる^[13]。身分に関わらず誰もが糸紡ぎに従事することで、多様なインドが「本質的に一つ」^[14]となるのだと説いた。糸紡ぎは、人々の経済的、精神的な自立を促すとともに、国民を連帯させ改革を推し進める原動力でもあった。

次に、カーディーのデザインを検討する。ガンディーの理想としたカーディーのデザインは、素朴である。色は、染色が施されていない白や生成りであるうえ、手紡ぎの糸は、太さが均等でないため布の表面に僅かな凹凸ができ、肌触りも滑らかだとは言えない。インドでは、そういった色や肌触りが、寡婦や貧しい地位の人々の衣服を連想させる。ガンディー自身は、カーディーの着用について次のように語る。

毎朝カーディーに手を通すたびに、私たちはダリドラナヤン（貧しい者を通して顕在する神）の名のもと、インドの大多数の飢えた人々のためにこれを行っていることを覚えねばなりません^[15]。

糸紡ぎと同様に、彼はカーディーをとおしてインドの精神的な統一を計った。加えて、トリヴェディによると、カーディーには装いに現れる身分の差を解消し、視覚的にインド国民を統一しようとする機能があったという^[16]。また、カーディーのデザインは、機械や外国製の布と対比をなしていたといえる。

西洋や極東から輸入してきた立派な織り物は文字通り大多数の兄弟姉妹を殺してきたのです。さらに数千の姉妹が恥ずべき生活に追い込まれてしまいました。真の芸術はそれを作った人の幸福、満足、純粋さを表現するものであるべきです。そのような芸術を我々の中に復活させたいのであれば、カーディーの使用が義務であるのが最も望ましいことです^[17]。

機械や外国製の布は、色鮮やかで滑らかな手触りかもしれない。しかし、過酷な労働や不平等な貿易による暴力をはらむ。一方で、国民自ら糸を紡ぎ、織った布の慎ましい表情には、たとえ華やかでなくとも、非暴力の生産体制が

あらわれている。色彩豊かな染織文化が根付くインドにおいて、カーディーのデザインは、その受容を困難にした一つの要因でもあったが、装飾の施されていないデザインに、ガンディーは道徳的な魅力を感じとっていた。ラスキンの思想に触れていたガンディーが、西洋のデザイン運動にもつうじるこのような視点を持っていた点は興味深い。カーディーの質素さは、ガンディーの精神とともに新しい感覚を反映したデザインでもあった。

ファストファッションからスローファッションへ

インドの独立から七〇年以上経過した今日でも、ガンディーの思想は様々な分野で受け継がれており、ファッション産業はその一つである。以下では、ファッション産業が抱える問題を簡単に整理し、近年強く推進されているサステナブルファッションの潮流を紹介したところで、ガンディー主義の傾向がみられる生産者の事例を分析する。

ファッション産業はその規模の大きさから、社会へ与える影響も広範囲である。一九八〇年代頃に登場したファストファッションは、多くの人々に最新の流行を楽しむ機会を提供してきた。一方で、流行の変化に即時対応するため高頻度で商品を入れ替え、安い価格設定を実現するための大量生産と大量消費を促進するビジネス形態は、ファッション産業が従来から抱えてきた、環境汚染、労働搾取などの問題をより深刻なものとしている。

衣服の生産、消費、廃棄の過程で環境にかける負荷は非常に高い。とくに、テキスタイルの生産は、原料の栽培や染色の過程で大量の水を消費し大量の汚染水を排出するため、航空や海運以上に気候変動に関与するとされる^[24]。加えて、石油を原料とする化学繊維は、廃棄後分解されることなく土壌や海洋汚染の要因となっている。

衣類の生産現場における労働の問題も後を絶たない。多くのアパレル企業が安価な労働力を追い求めた結果、衣服の製造にかかわる人々は貧困や劣悪な労働環境、労働者組合の組織も儘ならない状況を強いられており、そのほとんどが女性か子どもだという^[25]。このような現状を広く世間に知れ渡らせたのは、二〇一三年にバングラデシュで起きたラナ・プラザ崩落事故^[26]だろう。衣服の生産過程において労働者の賃金や労働環境の改善、透明性の向上が強く求められつつある。

く求められつつある。

環境や人権の擁護とともに、近年、生産者や消費者の間で関心を集めているのは、ファッションと動物愛護に関する問題である。二〇二一年、「グッチ」や「サンローラン」などを保有するケリングは、傘下にある全てのブランドにおいて毛皮の使用を禁止した^[27]。このような動向に大きな影響を与えているのは、アメリカの動物愛護団体 People for Ethical Treatment of Animals (PETA) である。二〇二〇年にPETAは、アルパカの農場で行われる毛刈りの動画をホームページ上で公開し暴力的な方法を非難した。その結果、複数のアパレル企業はアルパカ素材の使用を中止することを決定するに至った。過激なキャンペーンでも知られるPETAであるが、ファッション産業における動物福祉に関して、変化をもたらす一助ともなっている。

ファッション産業の拡大にともなうて払われてきた犠牲を認識しはじめた社会は、その反省から新たなあり方を模索している。環境省はサステナブルファッションを「衣服の生産から着用、廃棄に至るプロセスにおいて将来にわたる持続可能であることを目指し、生態系を含む地球環境や関わる人・社会に配慮した取り組み^[28]」と定義する。一九六〇年代から七〇年代に起こったヒッピームーヴメントに源流があるとされるサステナブルファッションは、当時人々の関心を集めていた環境保護への意識から生まれた^[29]。その後、八〇年代から九〇年代にかけて、徐々に環境に配慮したモノづくりを目指すブランドが現れた一方で、二〇〇〇年代にはファストファッションが急激な成長を見せる。それに対して、スローファッションという考えがケイト・フレッチャールによって広められた^[30]。一九八六年にイタリアの食品業界で始まった「スローフードムーヴメント」からアイデアを得たスローファッションは、ただ生産や消費の速度を緩めることなく、制限の中でファッションを享受することをすすめる新しい方法だという。同時に、そこには、喜びに対して責任と自覚のバランスが重要だとフレッチャールは付け加える。近年、ファッション産業で見られる省察は、ガンディーが抱いた近代化や機械への懸念と問題意識を共有する。また、資源や労働力などの限界を見据えてファッションを楽しむというスローファッションの考え方は、カーディーにまつわるガンディーの精神を思い起こさせる。次節では、ガンディーの思想がサステナブルファッションにどのように取り込まれているのか、インドを拠点とする二つの生産者の例をとおして検証したい。

〈事例一〉ウーマン・ウィーヴの取り組み

サステナブルファッションを探索の道は様々に提案、実践されている。ここで挙げるウーマン・ウィーヴ (Woman Weave) の取り組みは、地域主義的なモノづくりの体制の構築と雇用による女性の地位の向上を試みている事例である。ウーマン・ウィーヴは、二〇〇二年にサリー・ホルカー (Sally Holker) が北インドのマディヤ・プラデーシュ州のマヘーシュワルという地域に設立した組織である。ウーマン・ウィーヴが目指すのは、手織りが地元女性の有益かつ持続可能で、やりがいとと尊厳のある生計となり、彼女らの生活の質を向上させることだという³⁾〔図4〕。ガンディーとカーディーの地域経済に関する思想に影響を受けていると表明するウーマン・ウィーヴはグディ・ムディ・プロジェクト (Gudi Mudi Project) を主導する⁴⁾。このプロジェクトは、離婚した女性や、夫と死別した女性、障がいのある女性たちを中心に糸紡ぎと手織り技術の教育を行い、彼女らによって作られた製品を販売することで支援に寄与する。さらに、グディ・ムディ・プロジェクトの問題意識は、原料である綿の流通や市場にも及ぶ。マヘーシュワルは綿花の産地であるが、そこで採れた綿花は地元でほとんど消費されない。およそ三〇〇〇人もの職工がいるのにも関わらず、マヘーシュワルで使用する織物の原料はインドの他の地域から輸送され、不安定な流通経路は地元の織物産業に弊害をもたらしている。そこで、グディ・ムディ・プロジェクトは、地元で栽培された綿花を狭い範囲で消費しようという取り組みを行いながら、環境への負荷軽減と、地域経済の安定を目指す。プロジェクトの製品は、伝統的な織物への再評価がなされつつある国内の市場や、サステナビリティや職人の手仕事に関心を高める海外の市場と、地元のコミュニティとをつなぐ役割を果たす。ウーマン・ウィーヴのテキスタイルは、グローバル化がもたらす地域経済や環境への負荷に対して、手織り布の生産を広めることでガンディーの精神を現代に息づかせる〔図5〕。



上：図4 | 手織りに従事する女性
WomenWeave公式Instagramより

下：図5 | WomenWeaveの製品
WomenWeave公式Instagramより

〈事例二〉ハウス・オブ・ワンダリング・シルクの取り組み

衣服のサステナビリティを問うとき、素材への関心は不可欠である。動物愛護への意識が高まりつつあるなかで、レザーの代替素材としてクルエルティフリーなヴィーガンレザーといった新しい素材を使用した製品の開発がすすんでいる。また、毛皮、レザー、羊毛などと並び絹糸は動物愛護の観点から非難を浴びる素材のひとつである。二〇一三年に設立されたハウス・オブ・ワンダリング・シルク (House of Wandering Silk [H.O.W.S]) は、ニューヨークに拠点を置く社会的企業である。H.O.W.Sは、「社会に取り残された女性に、適切な賃金、尊厳、持続可能性を伴う生計手段を提供し、彼女らの経済的自立とよりよい生活の創造する」ことを目的とし、テキスタイルにまつわる物語を発信



図7 | HOWS によるピースシルクコレクションの製品
HOWS公式HPより



図6 | 蚕が羽化した後の繭
HOWS公式HPより

しながら、商品開発と販売を行う^{〔33〕}。HOWSが展開するコレクションに、「ピースシルクコレクション (Peace Silk Collection)」がある。ピースシルクとは、絹糸の一種であり、アヒンサー (非暴力) シルク、とも呼ばれる。先述のとおり、アヒンサーは非暴力、不殺生を意味した。絹糸は、蚕が成虫になるまえに吐き出した繭の糸を紡いで作られ、通常の工程では、蚕が成虫となった時、繭を破り糸が切れるため、蚕は煮殺か乾殺される。PEAT Aによると、一キロのシルクを生産するためには、六六〇〇匹の蚕が殺されるという^{〔34〕}。対して、ガンディーの思想にも影響をうけたクスマ・ラジャイア氏が一九九〇年代に開発したアヒンサーシルクは、蚕を殺すことなく、破れた繭から糸を作る「図6」。誰も何も傷つけてはならないとする非暴力の思想は、エシカルな素材について現代の生産者や消費者に助言を与える。HOWSは、蚕が孵化するという事実とともに、短い繊維を紡ぎ、丁寧に織られた布のドレープや肌触りをピースシルクの美しさだと表現する^{〔35〕}「図7」。道徳的な生産過程が反映されるカーディーの白さや粗さと同様に、動物に優しい生産が厚みのあるピースシルクのうえに表れている。

ガンディー主義のテキスタイル

ふたつの事例からは、ガンディー主義がテキスタイルの生産をとおしてサステナブルファッションへ応用されるいくつかの可能性を確認することができる。第一に、手工芸による労働を包摂的な自立の手段として提案する点である。ガンディーは『ヒンド・スワラージ』のなかで、工場における労働環境と工場主と労働者の不平等な関係に言及しながら、機械がはらむ不道徳性を指摘した。それと対象をなす手段として誰にも適切な雇用を提供する糸紡ぎを推奨し、それがやがては国の自治につながると説いた。前節で紹介したとおり、衣服の製造工場では、家計を支えるために多くの女性が過酷な環境で働いている。ウーマン・ウィーヴやHOWSはとくに、離婚、配偶者との死別、身体の不自由、農業で生計を維持しているなど、社会的に弱い立場にある女性たちに目を向け、彼女らに「尊厳のある生計」を提供することを目指す。「尊厳のある生計」は、主に経済的自立によって成し遂げられると彼らは考える¹³⁶⁾。家族の収入や低賃金の労働に頼ることのない生活を女性たちに提供するウーマン・ウィーヴやHOWSの活動は、ガンディーが提唱した糸紡ぎとも目的を共有し、彼の理念や実践が現在でも一定の意義を成しえることを示す。第二に、草の根的な手法である。ガンディーはカーディーをとおして、地方の大多数の国民を政治運動へと招き入れた。糸紡ぎが誰にでも従事可能な仕事であるという信念のもと、彼は国民一人一人の日常生活から政治を動かし、国に大きな変革をもたらそうとした。ウーマン・ウィーヴもHOWSも小さな地域の職人の仕事を市場やメディアをとおしてサステナブルファッションというよりグローバルなコミュニティに取り込んでいる。ウーマン・ウィーヴは、マヘーシュワルの女性たちを雇用し地域生産を試みながら、国外でも商品の販売を行う。生産過程の透明性が重要だと考えるHOWSは自らの使命を「語り部 (Storyteller)」となることだと表現し¹³⁷⁾、オンライン上で、生産者や商品の製造過程を詳しく紹介する。このような取り組みは、生産者だけでなく消費者をも巻き込みながら、ファッション産業に変化をもたらそうとする。第三に、エシカルな美しさを提示する点である。ガンディーは、道徳性を反映する

カーディーのデザインに魅力を見出していた。虚飾と不道徳とを結びつけた二〇世紀初頭のイギリスなどで同様の考えはみられたものの、豊かな色彩や模様の染織文化が根づいていたインドで、質素なデザインはあまりに斬新であった。「生産者コミュニティの文化や歴史を布地に織り込んでいる」と語るHOWSも、情報も含めてデザインとし、道徳性を含む新たな美しさを提示している。ガンディーの感覚は、誰も何も犠牲にしないモノの美しさを今の私たちにも気づかせようとする。

むすびに

価格帯や、販路が限られていることなどから、サステナブルファッションは、未だ広く社会に受け入れられているとはいえない。本稿では、カーディーに込められたガンディーの思想を紐解きながら、それが現代のファッション産業に、どのような示唆を与えうるかを考察した。本稿で取り上げた、ウーマン・ウィーヴやHOWSは、ガンディーの影響を受けながら、テキスタイルの生産をとおしてファッション産業に変化をもたらそうとする事例であった。包摂的な雇用や地域住民を主体とする活動、情報や新たな価値の発信など、二つの組織がすでに行う取り組みは、ガンディーの理念や実践と同様の方向性がみられ、今後サステナブルファッションがガンディー主義から教訓を得る可能性を示した。近代化に逆らおうとするカーディー運動は、当時時代遅れだと批判を浴びたものの、スローダウンが求められる現代ファッションと呼応しながら、その思想は今でも社会によりよい変化をもたらそうとする。

岡田弥生（おかだ・やよい）

大阪大学大学院文学研究科博士後期課程二年。専門はインドの染織文化。マハトマ・ガンディーの思想がファッションにおよぼした影響について研究している。

註

- *1 ナンブーディリッパードゥ『マハートマとガンディー主義』大形孝平訳（研文出版、一九八五年）二〇七―二〇八頁。
- *2 Marand Singh, “In Conversation with Marand Singh,” filmed and uploaded by Prasad Bidapa, September 21, 2017, 0:07 to 0:13, Interview Video. https://www.youtube.com/watch?v=i-BNlC_e6vo.
- *3 インドにおける染織文化とスワデン運動の歴史については次を参照。Bipan Chandra, *History of Modern India* (Orient Blackswan Private Limited, 2009), Kindle.
- *4 ガンディーのカーディー創出までの経緯は彼の自叙伝を参照。マハトマ・ガンジー『ガンジー自伝』蠟山芳郎訳（中公文庫、一九八三年）四二八―四三六頁。
- *5 Mahatma Gandhi, “382. Draft Constitution for the Ashram,” in *The Collected Works of Mahatma Gandhi*, Volume 14, (Publications Division Government of India, 1999), 453–460, Electronic Book.
- *6 M・K・ガンディー『真の独立への道（ヒンド・スワラージ）』田中敏雄訳（岩波文庫、二〇〇一）一一〇頁。
- *7 ここで参照した『ガンジー自伝』の訳者である蠟山は、truthの訳語として satya が含む「存在する」という意味を考慮し「真理」ではなく「真実」という語を使用するが、本稿においては truth の原理や道理といった側面を重要だと考え、「真理」を truth の訳語とする。ガンジー『ガンジー自伝』四九六―四九七頁。
- *8 ガンジー、『ガンジー自伝』一七頁。
- *9 ガンディーは前引用文に続けて、次のように語る。「この、真実は、言葉の使いかたにおける誠実さのみならず、考え方における誠実さでもある。さらに、私たち真実に関する相対的な観念であるのみならず、絶対の真実、永遠の原則、すなわち神でもある」ガンジー、『ガンジー自伝』一七頁。
- *10 『仏教・インド思想辞典』早島鏡正監修、高崎直道編集代表（春秋社、一九八七年）七頁。
- *11 ガンディー『獄中からの手紙』森本達雄訳（岩波文庫、二〇一五）位置 No. 238/2295、電子書籍版。
- *12 福本圭介「非暴力直接行動を再導入する―ガンディーと私たちの未完の脱植民地化」『国際地域研究論集（JISSR Q）』第五号（二〇一四年）九一頁。
- *13 ガンディー、『真の独立への道（ヒンド・スワラージ）』一三三頁。
- *14 同訳書、三九―四〇頁。
- *15 同訳書、一三五頁。
- *16 M・K・ガンジー『ガンジー自立の思想―自分の手で紡ぐ未来』田畑健編 片山佳代子訳（地勇社、一九九九）一二四―一二五頁。
- *17 M.K.Gandhi, *KaddHand-Spun Cloth: Why and How*, edited by Bharatan Kumarappa. (Navajivan Publishing House, 1955), 4.
- *18 ガンジー、『ガンジー自立の思想』六九頁。
- *19 ガンディーがこのように表現するのは、糸紡ぎが貧しい人々の立場を想像させる行為だと考えるためである。「貧しい人がやらねばならないこの糸紡ぎを我々も皆一日一時間ぐらいは行うべきです。そうすることで我々は貧しい人々の気持ちで理解でき、彼らを通じて全人類とつながりを持つことになるのです」。同訳書、六九頁。
- *20 同訳書、七〇頁。
- *21 同訳書、一一〇頁。
- *22 Lisa Trivedi, *Clothing Gandhi's Nation: Home spun and Modern India*. (Indiana University Press, 2007).
- *23 ガンジー『ガンニー自立の思想』一三六頁。
- *24 House of Commons Environmental Audit Committee, “Fixing fashion: clothing consumption and sustainability,” UK Parliament, February 19, 2019, <https://publications.parliament.uk/pa/cm201719/cmselect/amenauad/1952/full-report.html>, 3.
- *25 “Fixing fashion: clothing consumption and sustainability,” 12-25.
- *26 二〇一三年にバンガラデッシュで起きた商業ビル崩落事故である。ラナ・プラザには多くのファッションブランドの縫製工場が入っており、事故以前から建物の違法な増改築などが問題となっていた。
- *27 “Kering Goes Entirely Fur Free,” Kering, September 24, 2021, accessed March 11, 2022, <https://www.kering.com/en/news/kering-goes-entirely-fur-free>.
- *28 環境省『SUSTAINABLE FASHION わが国のファッションを持続可能に』二〇二二年三月一日閲覧。 https://www.env.go.jp/policy/sustainable_fashion/
- *29 Jennifer Farley Gordon and Collen Hill, *Sustainable Fashion: Past Present and Future*. (Bloomsbury Academic, 2015), 265/6770&276/6770, Kindle Edition.
- *30 スローファッションと関係づけ、次を参照。Kate Fletcher, “Slow Fashion,” *Ecologist*, June 1, 2007, <https://theecologist.org/2007/jun/01/slow-fashion>.
- *31 “About Weave,” WomenWeave, accessed January 6, 2023, <https://www.womenweave.org/AboutUs.aspx>.
- *32 グディ・ムディ・プロジェクトと関係づけ、次を参照。“Gudi Mudi,” WomenWeave, accessed January 6, 2023, 2022, <https://www.womenweave.org/GudiMudi.aspx>.
- *33 “PURPOSE & VALUES,” House of Wandering Silk, accessed March 11, 2022, <https://www.wandering silk.org/purpose-values-values>.
- *34 “The Silk Industry,” PETA UK, accessed March 11, 2022, <https://www.peta.org.uk/issues/animals-not-wear/silk/>.
- *35 “The Peace Silk Collection,” House of Wandering Silk, <https://www.wandering silk.org/peace-silk-scarf-clothes>.
- *36 “Impact,” WomenWeave, accessed March 11, 2022, <https://www.womenweave.org/Impact.aspx>. “PURPOSE & VALUES,” House of Wandering Silk.
- *37 “PURPOSE & VALUES,” House of Wandering Silk.